

先月号は、遼陽に関わりのある人物でしたが今回は遼陽出身の人物です。まず「公孫度」から紹介します。名字は「公孫」のいわゆる漢字二文字の複姓です。中国では名前は一文字が極めて多いですが、司馬、諸葛、歐陽のように二文字の姓も見受けられます。子供に漢字を教える教材の一つに「三字経」^{注1)}と共に「百家姓」があります。これには448の単姓と60の複姓の計508の名字(姓)を載せています。やはり複姓は少ないですね。名字の総数は日本が圧倒的に多いですが、それでも中国のそれは数千もあるようです。「公孫」とは、公(こう)の孫と言う意味なので、春秋戦国時代の諸侯の孫は公孫であり特定の地域にある名前ではないそうです。因みに公孫の氏の中では、戦国時代に秦の国政改革を断行し後の秦の天下統一の礎を築いた「公孫鞅(商鞅)」が有名です。

さて公孫家は遼東半島では、190年頃から238年のわずか50年くらいでしたが、三代(度→康→淵)に亘って遼東半島全体を支配したのです。ちょうど220年に後漢が滅亡し三国時代に突入したころでした。(ある本には、魏、蜀、呉に公孫を加えて四国時代とも言えるを書いてあります)初代の公孫度は、資料には幽州遼東郡襄平県の人と出ています。幽州は今の河北省から遼寧省にかけて存在した地域です。三国志演義で有名な「董卓(?~192年)」が中央で実権を握ったとき、友人の徐栄^{注2)}の推挙もあり、遼東太守に任じられました。太守とは郡の長官で、権力の座に就いたわけです。彼が先ず何を行ったかと言うと、地元には彼の出自を軽んじる名族が多くいたため、これらの家に罪を着せ百余家を滅ぼします。遼陽は後漢の都の洛陽から遠く離れたところであったため、後漢が

衰退し董卓も部下の「呂布(?~198年)」に殺害された後、遼東地域は公孫氏による独立国の様相を呈してきました。そして黄巾の乱^{注3)}以来の混乱に乗じて遼東半島に50年に亘る半独立政権を樹立した訳です。公孫家を書くとき、私は奥州・藤原氏を思い浮かべます。藤原氏4代(清衡、基衡、秀衡、泰衡)は、1087年から1189年の約100年余り奥州・平泉を中心に半ば独立国として東北地方一帯に勢力を広げました。ところが都落ちしてきた源義経を匿ったことでついに源頼朝に滅ぼされたわけですね。4代目の泰衡は和睦を期待して義経の首をとり頼朝に差し出しましたが、関東の背後に独立政権があることを危惧した頼朝は出兵し泰衡を殺したのです。これにより奥州・藤原家はあっけなくほろんだのです。



公孫度
中国国家人文地理「遼陽」から

公孫度に話を戻しますと、彼はさらに高句麗や烏桓(今の内モンゴル

自治区に存在した遊牧民族)を討伐し功績をあげ、董卓死後に実権を握った「曹操」に賞され武威將軍、永寧郷侯の地位を与えられています。これについて遼東の王と自負していた彼は曹操から見下された思いを持ち、不満であったと伝えられています。その後、曹家の魏から実権は司馬家(晋朝)に移り、状況は大きく変化し、ついに238年3万の精兵を引き連れた「司馬懿(仲達)」により公孫家は滅亡させられました。やはり司馬懿には遠く離れていても無視できないほどの存在だったのでしょうか。司馬懿にうまく取り入って折角3代続いた公孫家を存続できなかったのでしょうか。交通機関が馬しかない時代、都から遠く離れたところでは、同じような独立政権ができるということでしょうか。

次に紹介するのは、「王爾烈(1728年~1801年)」という人物です。彼も遼陽の人です。幼いこ

ろから勉学に励みます。東北地方には以前書いたように三大名山がありますが、そのうちの千山の中腹にある「龍泉寺」に籠って勉強したそうです。大きくなって当然のように科挙の試験に取り組み、「殿試」という最終の皇帝の前での試験でも一番の成績でした。また書の腕前も超一流で、王羲之の気品を備えた書を継承する人、と称えられたのです。中央官庁の翰林院という、唐代以降朝廷で文書の起草を行う役所に入りました。「翰」という字は、羽とか筆の意味に使われます。昔は羽毛で筆を作りましたが、転じて文章を司る役人の意味ともなりました。この役所はエリート中のエリートの集団でした。彼はまた「三江才子」とも褒め称えられました。三江とは、「江蘇省」「浙江省」「江西省」の江の字がある省のことで、当時はこの三省が最も文化学術水準の高い地区といわれ、全国から有能な人が集まったそうです。その中で白眉だったとか。人格も優れ清廉潔白で、正義感が強く、かつ誠実な人柄は人々に親しまれていたそうです。これ以上の褒め言葉がないくらいの聖人君子の域に達した人物であったようです。彼の功績を讃え、高潔な人物像を紹介するため、遼陽市内の白塔公園から近い場所に「王爾烈紀念館」が建てられています。

彼は、「四庫全書」の編纂で名を残しました。四庫全書とは、清の乾隆帝の勅命により 1741 年から編纂された中国最大の漢籍叢書で、何と 36000 冊、230 万ページ、10 億文字という膨大なものです。編集に参加して名前が登録されている文人学者は 400 人を超えるとか。彼はその中の一人ですが中心になって作業を進めて行きました。四分類〈経・史・子・集〉されているので四庫全書という名が付きまして。中国国内の文献に留まらず、日本、朝鮮、ベトナムの漢籍にまで及んでいます。この叢書の印刷には中国の四大発明の一つである「印刷」技術を駆使したのかと思われるかもしれませんが、実は全て筆書なのです。したがって完成は 41 年後の 1782 年まで掛かっていますが、気の遠くなるような作業ではありませんか！ 四庫全書の正本は 7 部作られました。それを北京の紫禁

城など全国 7 か所に収蔵されたのです。しかし 7 部の内 3 部は、太平天国の乱や義和団の乱で焼失してしまいました。誠に残念なことです。中国は度重なる戦乱や文化大革命によって世界遺産級の書物や遺跡が多数失われていますが、中国だけでなく世界にとっても損失と言うほかありません。

本号でもう一人変わり種をご紹介します。中国人ではなく、現在ニューヨーク在住の日本人の「秋吉（稚吉）敏子」さんです。知る人ぞ知る世界的なジャズピアニストであり、作曲家、編曲家、ビッグバンドリーダー（現在バンドは解散）です。両親とも日本人で、彼女は 1929 年 12 月 12 日に遼陽で生まれました。従って現在 90 歳となります。

小学校 1 年生の時、3 年生の弾く「トルコ行進曲」に魅入られてピアノを習い始めるのです。後に女学校に上がる時、ピアノを良い教師に習うため大連に移ります。大連音楽学校で中国人の楊考毅にピアノを習いますが、敗戦になったので高校生の時大分に引き上げました。別府の進駐軍のキャンプなどでのジャズピアニストで名前を次第に挙げて行きます。1949 年、20 歳の時上京して、当時の日本のトップグループでピアノ演奏を始めます。1951 年には、あの渡辺貞夫を加えコーギーカルテットを結成。1956 年、26 歳の時単身渡米して、バークレー音楽院で学びます。その後アメリカ各地で演奏し、数々の賞を受賞し、1999 年には日本人で初めて「ジャズの殿堂」入りも果たしました。日本にも何度も里帰りし、多くの演奏会で美しい旋律を披露しています。とにかく素晴らしい人物ですね。（続く）

■注

- 1) 三字経：伝統的な中国の初学者用の学習書。3 文字で 1 句として偶数句末で韻を踏んで覚えやすくしている。南宋の「王応麟」の作と伝えられるが明確ではない。
- 2) 徐栄：（生年不詳～192 年）後漢末期の武将。幽州玄菟郡（今の北朝鮮あたり）出身。友人の公孫度を遼東太守に推挙した。
- 3) 黄巾の乱：後漢末期の 184 年に、道教の一派である太平道の教祖「張角」を指導者とする信者が各地で起こした農民の反乱。目印に黄色い頭巾を頭に巻いたことからこの名称がついた。